

1. 京丹後市須田平野古墳の調査（1）

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学文学部考古学研究室では、2020年より京丹後市教育委員会・京丹後市久美浜町須田区などと共同で、京丹後市湯舟坂2号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を明らかにするとともに、その成果を地域資源として活用するための様々な取り組みをおこなっている（本書第I部第2章参照）。今年度はその一環で、湯舟坂2号墳の至近に位置し、先行する首長墳と目されながらも墳丘形態や築造時期などの評価の定まっていない須田平野古墳の調査に着手した。調査は2022年9月19～27日にかけておこない、墳丘測量と横穴式石室の実測を実施した。本稿では墳丘測量の成果を報告する。

なお調査にあたっては、地権者である土出政信氏や、岸本優一氏、岸本卓也氏をはじめとする京丹後市久美浜町須田区、新谷勝行氏、奥勇介氏をはじめとする京丹後市教育委員会には大変お世話になった。また調査中、岡田大雄、金宇大、栗山雅夫、竹村亮仁、初村武寛、藤井整の諸氏より有益なご助言をえた。ここに記して感謝したい。最後に、調査参加者は以下の通りである。

菱田哲郎・諫早直人（以上、教員）、溝口泰久・井川瑞季・守田悠・吉永健人（以上、博士前期課程）、松田篤（科目等履修生）、藤川聖起・鈴木詩織・大倉響稀・大須賀丈汰郎・重野正和・山内愛弓・横白彩江・岡崎壮太・本田龍平・依田萌奈（以上、学部生）（諫早直人）

2. 立地と環境

（1）周辺の地形

須田平野古墳は京丹後市久美浜町須田小字東側に所在する単独墳である。川上谷川に注ぐ伯耆谷川右岸の徳良山（316 m）から北方向にのびる尾根の先端に位置する。現在は木々が生い茂り古墳からの眺望はよくないものの、麓の農道からの比高差は約30 mを測り、木々が



写真1 基準点測量の様子



写真2 墳丘測量の様子



1. 須田平野古墳 2. 平野山上古墳 3. かせわ古墳 4. 九十九塚古墳群 5. 紋谷古墳 6. 暮石古墳群 7. オヤゲ古墳群 8. 鳥ノ奥古墳群 9. 湯舟坂2号墳 10. 湯舟坂1号墳
11. 北垣古墳群 12. 二枚谷古墳 13. コウ田古墳群 14. 上日冷古墳 15. 下日冷古墳群 16. セイガイ谷古墳群 17. 八坂神社古墳群 18. 下山古墳 19. 湯舟坂遺跡 20. 天王谷古墳群
21. 東ガキ古墳 22. 王の宮山上古墳群 23. 王の宮横穴群 24. コリガ鼻古墳群 25. あぐら谷古墳群 26. 谷ガへ田古墳群 27. 崩谷古墳群 28. アバタ東古墳群 29. 権現山古墳
30. 大宮谷古墳群 31. 東岳古墳 32. 高西谷古墳群 33. 大久保谷古墳群 34. 岡田古墳群 35. 陵神社古墳群 36. 八幡山古墳群 37. 橋爪遺跡 38. 茶臼ヶ岳古墳群 39. 御社山古墳群
40. 鳥茶白山古墳 41. 谷古墳群 42. 八条古墳群 43. 芦高神社古墳 44. 新谷古墳群 45. 狐塚古墳群 46. 愛宕山古墳群 47. だんご山古墳群 48. 柴原古墳群 49. 後ヶ谷古墳群
50. 明神山古墳群 51. 向山古墳群 52. マガリ古墳 53. 青谷古墳群 54. 堂谷古墳群 55. ケンケン山古墳群 56. 城地東古墳 57. 城地古墳群 58. 畑大塚古墳群 59. 平尾古墳
60. ヒジリ古墳群 61. トクジヤ古墳群 62. ラント古墳群 63. 上西谷古墳群 64. 下西谷古墳群 65. 下路古墳

図1 須田平野古墳周辺の古墳分布 (国土地理院 1/25000 地形図「久美浜」「須田」を基に作成)

無い状態であれば伯耆谷全体を見渡すことができるだろう。（重野正和・守田悠）

（2）歴史的環境

川上谷川流域において縄文時代以前の遺跡は確認されていないが、久美浜町域では打製石器が出土・採集されているほか、縄文土器片が出土している（安藤ほか 2004、京丹後市史編さん委員会編 2010）。弥生時代になると川上谷川流域の各所に集落が形成され、弥生時代中期後葉から後期後葉の集落である橋爪遺跡（図 1：37）などが確認されている。墳墓では権現山古墳（29）の調査時に破碎後供献された甕と壺をもつ弥生時代後期前葉の木棺墓が検出され、橋爪遺跡東側の丘陵上の茶臼ヶ岳古墳群（38）で後期中葉の台状墓 2 基が確認されている（京丹後市史編さん委員会編 2010、春日 2014）。

古墳時代に入ると、川上谷川流域には多くの古墳が築造されるようになる。前期には、川上谷川右岸の丘陵上に前方後円墳で全長約 42 m の島茶臼山古墳（40）、川上谷川左岸の丘陵上に方墳の権現山古墳などが築造された。中期の詳細は明らかではないが、川上谷川右岸の前方部が削平された前方後円墳と目される芦高神社古墳（43）が島茶臼山古墳に続く首長墳と考えられている（京丹後市史編さん委員会編 2010）。後期には再び古墳の築造が盛んになり、川上谷の平野部を囲む丘陵の尾根上に多数の群集墳が形成される。その中で最も古墳が集中しているのが須田平野古墳の位置する伯耆谷であり、谷の奥部や丘陵上に 130 基あまりの古墳が確認されている。谷の北側の丘陵上にセイガイ谷古墳群（16）、谷の南側の丘陵上に天王谷古墳群（20）、ユリガ鼻古墳群（24）、谷の奥部手前には双龍環頭大刀が出土した湯舟坂 2 号墳（9）を含む湯舟坂古墳群、谷の奥部に暮石古墳群（6）などの群集墳が造営され、谷の南側の丘陵頂上には山上平野古墳（2）、かせわ古墳（3）などの単独墳が築かれた。伯耆谷の古墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳を含んでおり、湯舟坂 2 号墳や須田平野古墳のような巨石を用いた横穴式石室もみられる（奥村 1983、京丹後市史編さん委員会編 2010、春日 2014）。

また、湯舟坂遺跡（19）からは須恵器円面硯・転用硯などの官衙に関わる遺物が採集されており、伯耆谷に古代官衙遺跡が存在する可能性が指摘されている（奥村 1983、春日 2014）。伯耆谷を西に行くと丹後地域と但馬地域を結ぶ大坂峠があり、この地は二つの地域をつなぐ交通の要衝として重要な役割をもっていたと考えられている（京丹後市史編さん委員会編 2010）。（大倉響稀・守田）

3. 既往の研究

須田平野古墳は 1920 年に『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊において梅原末治によって初めて報告された。「平野ノ古墳」と称し、墳丘の高さ 15 尺（約 4.5 m）、玄室長 14 尺 3 寸（約 4.3 m）、玄室幅は中央部で 7 尺 5 寸（約 2.2 m）、羨道長 12 尺 2 寸（約 3.7 m）とし、石室の実測図も示している。墳形については「圓墳」と推定しており、「熊野郡ニ於イテ最モ大ナル古墳ノ一トシテ、又比較的完存セル點ヨリ地方ノ史蹟トシテ尊重スベキモノナリ」と高く評価している（梅原 1920：144）。

1923 年に刊行した熊野郡誌では、「川上村の古墳」として上記報告を引用しているが、熊野郡誌編纂にあたって作成された調査書に、以下のような記載がある。

【史料】「郡誌編纂材料川上村調査書」『佐治家資料』（神谷神社蔵）

字須田

一、古墳其他

蝙蝠穴 字平野大ナル石槨 奥行二間二尺／巾一間一尺 高七尺 隧道二間半

玄室長約 4.2 m、玄室幅約 2.1 m、玄室の高さ約 2.1 m、羨道長約 4.5 m とすると、現在の須田平野古墳の横穴式石室の計測値と概ね一致する。字名からも須田平野古墳を指すものとみて間違いなく、当時、地元では「蝙蝠穴」とも呼ばれていたようである。

1968、1969 年の同志社大学考古学研究会による調査では「平野古墳」と称して石室の実測及び墳丘測量調査がおこなわれ、墳形について新たに方墳の可能性が指摘された（同志社大学考古学研究会 1973、山内 1988、山口 2014）。加えて 1983 年刊行の湯舟坂 2 号墳の報告では前方後円墳の可能性も指摘されている（奥村 1983）。また、この段階で伯耆谷の古墳群を須田古墳群とし、その中の平野古墳という位置づけで報告されているが、2004 年刊行の久美浜町史以降、須田平野古墳という名称が用いられている（久美浜町史編纂委員会編 2004）。

これまで築造時期を推定できるような遺物の出土はないが、石室の形態から古墳時代後期後葉の築造と考えられてきた（同志社大学考古学研究会 1973、山内 1988、久美浜町史編纂委員会編 2004）。また、細川康晴が石室の構築技法から丹後地域の主要河川ごとに畿内系横穴式石室を整理し、湯舟坂 2 号墳に先行する型式として位置づけている（細川 2000）。

なお石室内で百姓一揆の謀議や賭博がおこなわれたという伝承が残っており（奥村 1983）、石室は少なくとも近世には開口していた可能性が高い。（大須賀丈汰郎・守田）

4. 墳丘の測量調査

今回、測量をおこなったのは墳丘を中心とした約 50m 四方の範囲の地形である。湯舟坂 2 号墳の周囲に位置する基準点をもとに基準点測量をし、9 月 19-27 日の 9 日間で地形測量をおこなった。測量については Leica Geosystems 社 TCR405、TCR405Power を用い、3136 点を計測した（図 2）。計測点については 1 m メッシュで測点をおき、墳丘付近や地形の変化点では 0.5m ごとに測点を変えるよう留意した。測量した座標データについては Gio Look 社 Gioline (Ver.4.70) および Golden Software 社 Surfer19 を用いて等高線図、墳丘断面図（図 3・4）を作成した。

まず、横穴式石室が位置する部分では、標高約 70.8 m を頂点とした高まりが形成されており、標高約 67.0 ～ 68.0 m 付近まで同心円状に等高線がまわることから、この部分は墳丘部とみて間違いのないだろう。現状では墳頂部に明確な平坦面は認められない。また南東側では等

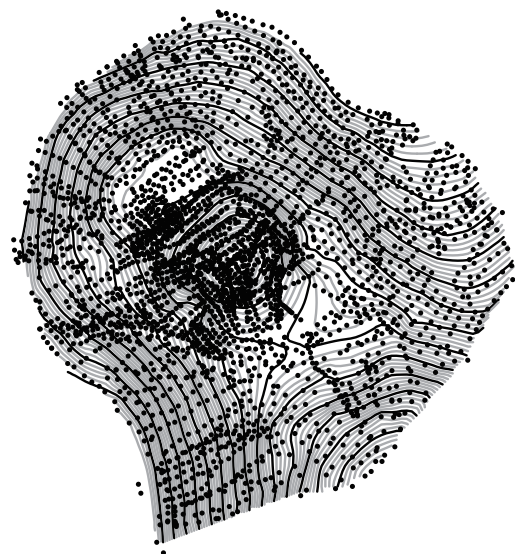


図 2 計測点

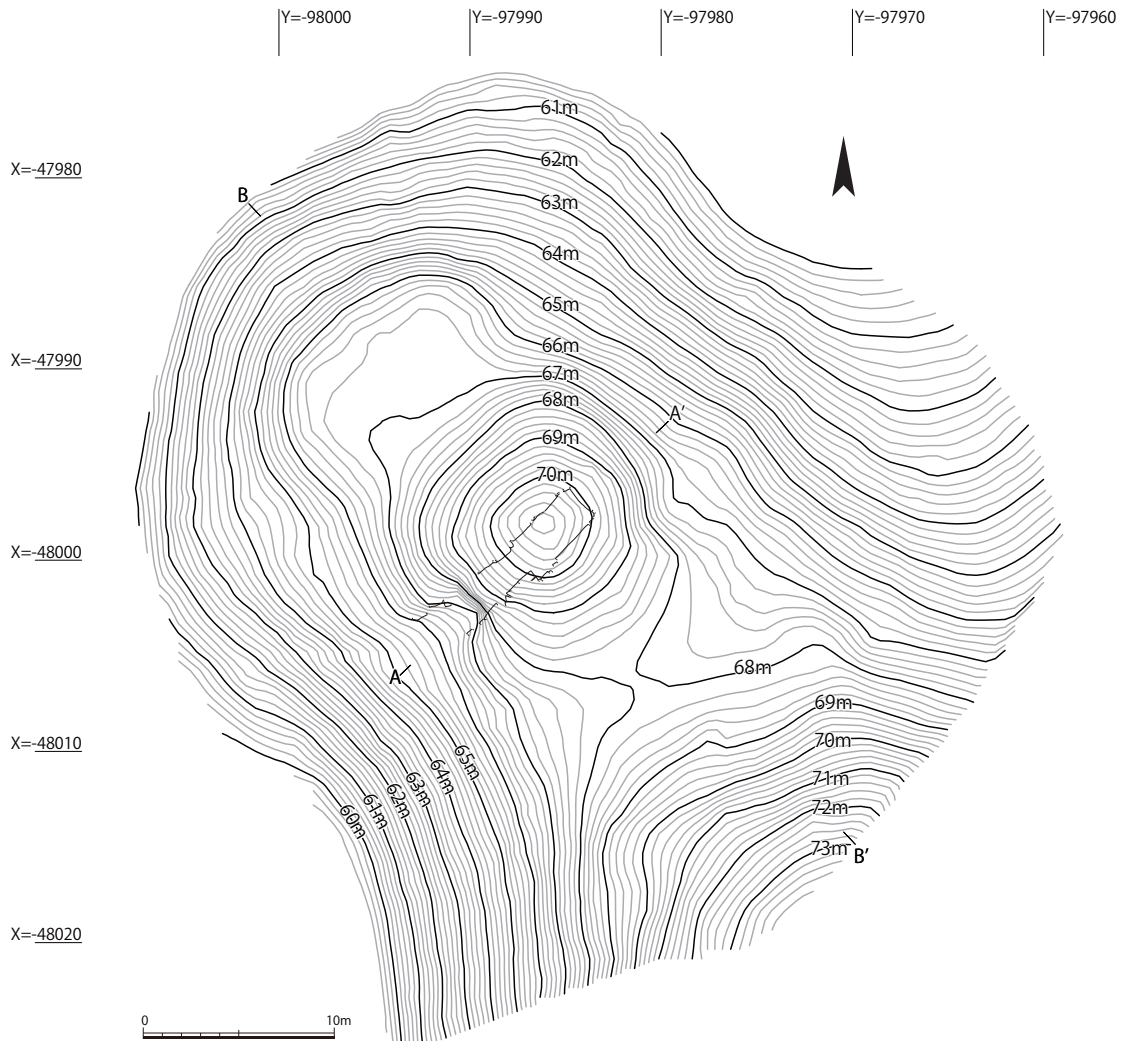


図3 墳丘測量図 (S=1/400)

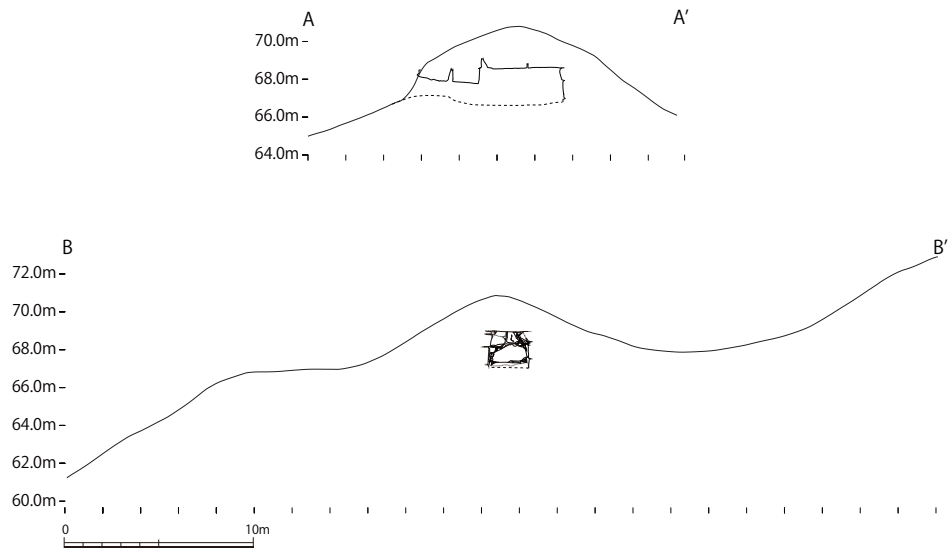


図4 墳丘縦断面図 (上)、横断面図 (下) (S=1/400)

高線が円弧を描くが、北西部では直線的になっている。北東部・南西部は斜面が連続しており、明瞭な傾斜変換点は確認できていないが、北西部で標高約 67.0 m、南東部で標高約 68.0 m 付近で傾斜がみられなくなり、それぞれ平坦面と接続する。北西部では約 8.6 × 6.6 m の範囲で隅丸長方形の平坦面を形成している。標高約 66.0 m 付近から急斜面となり、本来の尾根の地形となる。南東部では、石室の位置する確実な墳丘部と、南東方向から伸びる尾根との間に堀切状の谷間がみられ、北西部ほど明瞭な面を捉えることは困難だが、おおよそ 5.0 × 9.0 m の平坦面を形成する。石室は尾根と直交するように南西方向に開口しており、石室中軸は現在の墳頂部中心とややずれている。現在確認できている石室の床面は標高 66.5 m だが、現床面は土砂で埋まっていることから、本来の床面はさらに低いものと考えられる。(吉永健人・松田篤)

5. 須田平野古墳の墳丘に関する予察

本調査によって墳丘およびその周辺地形についての基礎的なデータをえることができた。この成果をもとに須田平野古墳の墳丘に関して、現状で可能な範囲での検討をおこなう。

墳丘は南東方向から北西方向に伸びる尾根上に築造されている。南東部からみていくと、この尾根は標高 72.0 m 付近にわずかに傾斜変換が認められ、やや急になっている。その下方に墳丘が形成されていることを考えると、後背斜面を一部切り崩して、その土を墳丘盛土に使用した可能性がある。後背斜面は標高 68.0 m 付近で傾斜が緩やかになり、墳丘との間には 5.0 × 9.0 m 程の平坦面が認められる(以下「平坦面 A」)。横穴式石室の位置する確実な墳丘部の墳頂は標高約 70.8 m

で、確実な墳丘部の北西側には標高約 67.0 m で約 8.6 × 6.6 m の平坦面が形成されている(以下「平坦面 B」)。南西側には麓から上がってくる現代の遊歩道が存在するが、羨道入り口に接続するように伸びていることから考えると、その前身となる墓道のような道が築造当時から存在していた可能性もある。

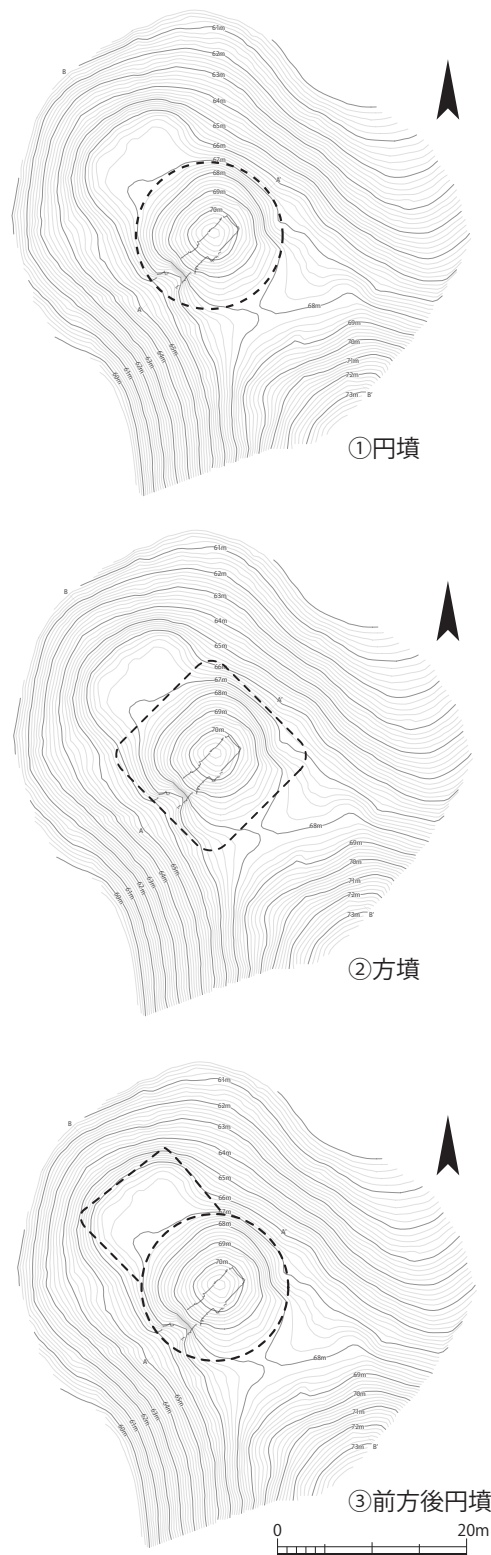


図5 墳丘復元図 (S=1/800)

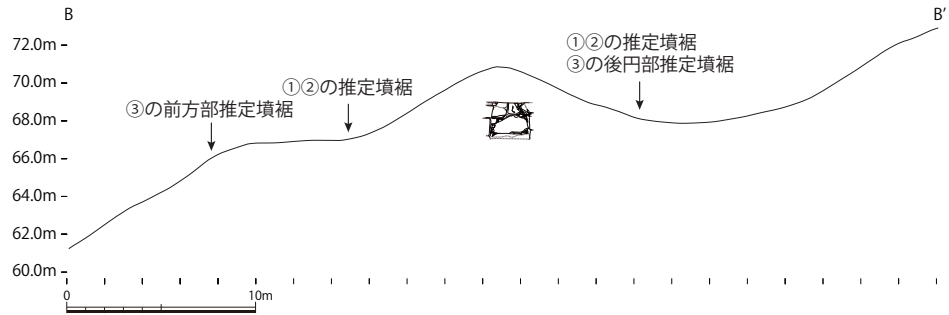


図6 墳丘復元断面図 (S=1/400)

既往の諸報告では、当古墳の墳形について、円墳説（梅原 1920、山口 2014 など）や方墳説（同志社大学考古学研究会 1973、山口 2014）、北西方向に前方部がとりつく全長 22 m の前方後円墳説（奥村 1983）と、全く異なる見解が示されている。ここでは、考える墳形ごとに状況を整理し、現状における墳丘復元案を提示しよう。

①円墳の場合

墳丘北東部および南西部では尾根の斜面と連続しており墳裾が不明瞭ではあるが、墳丘南東側の標高 67.2 m 付近で傾斜がやや緩やかになり平坦面 A へと移行する。この付近を墳裾と捉えれば、直径約 16 m の円墳に復元できる。推定される墳裾のラインは、墳丘斜面と両平坦面との傾斜変換点、および現状最も外側の羨道石材付近を巡り、現在の遊歩道に面する。東から南、及び南西付近は等高線が弧を描くが、北西付近では等高線が直線的になっていることをどのように評価するかが課題となる。

②方墳の場合

墳丘北西部の等高線が直線的になっていることを根拠とする。東西南北それぞれに各頂点をもち、石室が南西側の一辺に開口する方墳と捉えることができる。直線のラインが残る北西側で復元すれば 1 辺 15 m 程度に推定できるが、それ以外の 3 辺や各頂点は曲線的であり、墳丘の崩壊も想定する必要があるが、判然としない。

③前方後円墳の場合

平坦面 B を前方部として捉えれば、北西—南東方向に主軸をもつ全長約 22 m、前方部幅約 10 m の前方後円墳として復元することができる。この場合、石室は墳丘主軸に対してほぼ直交する。前方部上面と現在の石室床面のレベルはほぼ同じ、もしくは石室床面がやや高くなるが、現在の石室床面は土砂によって埋もれており、本来の床面の高さはさらに低くなることは間違いない。前方部上面の高さが後円部裾の高さより 0.9m 程低く、前方部側が後円部側に対して非常に低い点や、前方部側の裾をはっきりと示す等高線の変化が一切認められない点は、前方後円墳として捉えるにはやや不自然な要素である。

以上、墳丘形態を復元するにはまだ不明な点が多いが、現状考えるいくつかの可能性を指摘した。これらを総合的に勘案すれば、現状では①円墳である可能性が最も高いのではないかと考える。②や③については不自然な点も多く、当時期における周辺地域の古墳の状況に鑑みても円墳としてみるのが自然だろう。しかし、いずれにしても墳丘をはさむ 2 つの平坦面の性格については現状不明であり、今後の調査に委ねるほかない。特に前方後円墳の前方部とする意見もある平坦面 B の性格に関しては、後世の改変か、あるいは前方部でなくとも築造段階で何らかの役

割を有していたのか、など当古墳を考える上での重要な問題を内包している。今回えられた基礎データをもとに、今後さらに調査・研究を進め、須田平野古墳の実態解明を目指したい。(吉永)

6. おわりに

今回の調査では、世界測地系にもとづく正確な位置情報や標高情報を取得して測量調査をおこなったことで須田平野古墳の詳細な地形状況が明らかになった。しかし、墳形の確定には至らず、今後発掘調査によって明らかにする必要がある。須田平野古墳は以前より湯舟坂2号墳に匹敵する規模の石室をもつ古墳として言及されてきた(新納 1983)。加えて、当地域は先述のとおり川上谷川流域でも集中して古墳が築造されている、丹後地域の古墳時代の様相を明らかにするうえでも重要な地域であり、今後も引続き調査を続けていく予定である。

なお、今回の測量調査であわせておこなった石室の実測調査については、現在整理中であり、来年度に改めて報告することとしたい。(井川瑞季)

謝辞

本稿の作成にあたって、山田洋一氏(文学部特任講師)より大変有益なご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

なお、本稿は令和4年度京都府立大学 ACTR「過疎化が進む地域における文化遺産の地域資源化に向けての実践的研究」および日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))「古墳・副葬品の多角的検討にもとづく日本列島初期仏教受容史の再構築」(22H00719)の成果の一部である。

参考文献

- 梅原末治 1920「川上村古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府教育委員会
- 奥村清一郎 1983「1. 位置と環境(3) 歴史的環境」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 春日日光 2014「川上谷川流域を中心とする地理的・歴史的環境」『同志社考古』第13号 同志社大学考古学研究会
- 久美浜町誌編纂委員会編 1975『久美浜町誌』久美浜町
- 久美浜町史編纂委員会編 2004「考古」『久美浜町史 資料編』久美浜町教育委員会
- 京丹後市史編さん委員会編 2010「第5章/佐濃谷川、川上谷流域とその周辺の考古資料」『京丹後市の考古資料』京丹後市役所
- 京都府熊野郡役所 1923『京都府熊野郡誌』
- 田中彩太 1973「丹後地域の古墳概観」『同志社考古』第10号
- 新納泉 1983「8. まとめ(5) 墳丘と石室」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 細川康晴 2000「丹後地域における畿内型横穴式石室の系譜」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山内陽詳 1988『畑大塚古墳群』(京都府久美浜町文化財調査報告第10集) 久美浜町教育委員会
- 山口誠司 2014「久美浜町の横穴式石室について」『同志社考古』第13号 同志社大学考古学研究会
- 山田洋一編 2022『京丹後市久美浜町太刀宮文書(久美浜代官所郡中代文書)・佐治家資料調査と御用留横断研究』(京都府立大学文化遺産叢書第26集) 京都府立大学文学部歴史学科

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱い、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
